

スポーツ・イベントにおけるボランティア活動の満足度と生活の質の関係

A study on the relationship between the satisfactions of the sports volunteer and quality of life

1K05B246

渡邊 桃子

指導教員

主査 作野誠一先生

副査 間野義之先生

【緒言】

これまでに、なぜスポーツと生活の質が取り上げられているのかについては、2つの視点から理解することができる。1つは、健康であり体力を一定水準に維持することで行動範囲や交流関係を確保でき、それらが生活の質を規定する重要な要因であるという視点である。そのため、高齢社会において今後ますます健康や体力維持のための運動やスポーツ、運動やスポーツをすることで形成される社会的交流が注目されている。2つ目は、成熟社会では、平均や基準よりも個性や自立、そして自由が尊ばれ、自由時間の増加にともない生活スタイルそのものに対する関心が高まるという視点である。よってスポーツや余暇行動が個人のクオリティ・オブ・ライフにどのようなインパクトを与えるのかが重要なのである。しかし、スポーツと生活の質に関する研究は医療関連のものや運動あるいは運動処方という概念を基礎にした研究が多く、北村(2000)が「スポーツが生活の質を高めることは自明の理である」という基本認識が運動やスポーツにかかわる研究者の中に存在する」と指摘するように、社会心理学的領域・社会科学的研究における研究は少ない。そこで、本研究の目的は、社会科学的研究として、スポーツ・イベントにおけるボランティア活動の満足度と生活の質の関係を明らかにすることである。

【研究対象】

上記の目的を明らかにするため、2008年8月8日～10日にかけて行われた湘南オープンウォータースイミング 2008 におけるボランティア計 461

名を対象とし、ボランティア活動の初めに調査票を配布、後日返送してもらう配票郵送調査を実施した。配票は391票に対し、回収数は219票、回収率は56.0%であった。

【研究方法】

先行研究を参考に、個別満足度を15項目、回答は5段階のリッカート型尺度評価(1:全くあてはまらない-5:とてもあてはまる)を採用した。総合満足度については、回答は7段階のリッカート型尺度評価(1:非常に不満-4:どちらともいえない-7:非常に満足)を採用し、総合的な満足度に最も影響を与えている要因について自由記述を求めた。本研究における生活の質は、ボランティア活動によって「生活が充実していること」「生きがいをもつこと」「仲間ができること」これら3つの観点から捉えられるものとし、前者2つは5段階のリッカート型尺度評価(1:全くあてはまらない、5:とてもあてはまる)を採用し、後者は3項目、2件法で尋ねた。

【結果と考察】

個別満足度と総合満足度、個別満足度と生活の質、総合満足度と生活の質それぞれで相関を求めたところ、相関関係が見られたことから、因果モデルを作成、重回帰分析を行った。個別満足度が総合満足度にどのような影響を及ぼしているのかについては、「達成感を得た」が一番強い説明力を持っており、その他に「今回の経験は私にとって何も得るものはない」「充実した時間を過ごすことができた」「与えられた責任に対して非

常に満足している」にも有意差が見られた。生活の質（標準化した 3 変数の合成変数）に対して、個別満足度がどのような影響を及ぼしているのかについては、「自分が大会の実現に貢献することができた」「将来役に立つ技術を学ぶことができた」「今回の経験は私にとって何も得るものはない（逆転項目）」、「人のために役立つことができた」において有意差が見られ、説明力が一番強かったのは「自分が大会の実現に貢献することができた」であった。

総合満足度と一つの変数としての生活の質にも有意な相関関係があったことから、スポーツ・イベントのボランティア活動の満足度と生活の質に関係があることが明らかにされた。

ボランティアは“人のため”というイメージが強いが、ボランティア活動をして結果的に生活の質が向上したと認識していることから、実は“自分のため”でもあるということがわかった。ボランティア活動が生活の質との関わりがあるからこそ、主体的に参加しているのではないかと考えられる。